

An abstract painting of a woman's face in profile, facing left. The face is rendered in a light, warm tone. The eye is a large, dark, expressive brushstroke. The mouth is a bright red, circular brushstroke. The hair is a long, thin, dark line that curves down. The background is a mix of light and dark tones, with some dark, textured brushstrokes.

美女

連城三紀彦

美女



連城三紀彥

集英社

美^び女^{じょ}

一九九七年三月二〇日 第一刷発行

著者——連城三紀彦^{れんじょう みきひこ}

発行者——小島民雄

発行所——株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇 千二二五〇

〇三三三三〇一六一〇〇〔編集部〕

電話 〇三三三三〇一六三九三〔販売部〕

〇三三三三〇一六〇八〇〔制作部〕

印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——ナシヨナル製本協同組合

©1997 Mikihiko Renjo, Printed in Japan

ISBN4-08-774246-6 C0093

著者との諒解により検印は廃止いたします。

定価は帯およびカバーに表示してあります。

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目

次

夜 光の唇

7

喜劇女優

47

夜 の肌

89

他人たち

125

夜
の
右
側

砂
遊
び

夜
の
二
乗

美
女

167

215

237

277

装 画 村上みどり

デザイン 上原ゼンジ

美

女

夜光の唇

その日の午後、一時少し前に藤木集介は自分が経営する医院の個室で電話を受けた。

「奥さまからです」

受付の娘がそう言い、電話が切り替わり、

「私ですけど……」

聞き慣れた妻の声に代わった。特徴のある掠れ声は他人のようによそよそしかったが、そのよそよそしきこそが聞き慣れた華江はなえの声なのである。

「今日が何の日か憶えている？」

「今日？ 何日だったかな、今日は……」

藤木は正面の壁へと目を投げてそう呟つぶやいた。

壁には普通の医師の部屋なら不釣り合いな写真のパネルが飾られている。

アメリカの若い女優が等身大の裸身で浜辺の波うち際に寝そべり、全世界の男たちを魅了するなまめかしい目で、デスクの前に座り受話器を耳にあてがった四十八歳の医師を見つめた。砂の波のように長くくねったその体が壁をほとんど独占していて、彼が目で探そうとしたカレンダーはその女優の半ば砂に埋もれた足に蹴られたような壁の下方の隅に、小さく引っ掛かっている。十一月だとはわかったが、今日という日は三十の数字の中に紛れこみどこかへ消えてしまっていた。

「十一月十六日じゃないの」

受話器の声にそう教えられても彼には思いだせなかった。彼はぼんやりと女優の目に視線を戻し、もう数年間、日に何度も見ているのに何故この写真の女は俺を飽きさせないのだろうと考えていた。たぶんその目のせいだ……濡れた金色の髪が乱れ落ちて潮風に揺れる中で、二つの目はかすかにうごめいて見える。目がブルーの舌のように、白衣の裏に隠れた彼の肌を嘗めてくる……そう、体と同じように何の衣装もつけていない無防備な裸の目だ……。

「十一月十六日って何かある日か」

彼は上の空でそう訊いた。

「嫌だわ、私たちが一年に一度だけ結婚していることを思いだす日じゃないの。——それも忘れてしまったのなら、私たちもう本当に別れてしまった方がいいみたいね」

ハスキーな声は冗談のように笑ったが、乾いた笑い声のどこかに妻の本音が混ざっているのを十三年間の夫の耳は聞き逃さなかった。

「そうか、結婚記念日だったな。いや、忙しすぎて忘れていただけだ」

「年々、思いだすまでの時間が長くなっていくわね」

「年々忙しくなっているからさ。今夜は早めに帰るよ……君へのプレゼントは例年のように君が自分で買ってくれ。買いにいつてる時間がないんだ。午後にカウンセリングが二つと手術が入っている……」

「そうだと思ってもう買ってしまった——今年はディオールのワンピース」

「いくら？」

「三十七万」

「高いな」彼は思わず苦笑した。

「許してよ。私たちの関係に合わせて年々安くしてるのよ。八年前は百万の着物だったわ。それに今年はあなたのためにもっと贅^{ぜいたく}沢な贈り物を用意したもの……あなたには信じられないような素敵な贈り物だけれど私には高くつくわ、きつと……それに比べたら三十七万なんて安いものよ」

「何なんだ、意味ありげだな」

「それは後の楽しみにして」

受話器が謎めいた笑い声でそう答えた時、ドアにノックがあった。

「仕事のようなね。じゃあ」

そう言い、彼の返事も待たずに電話は切られていた。受話器をおきながら、ふと、妊娠なのか

もしれないと思った。四十二になる今日まで妻には子供ができなかった。いや、実際には過去にも二、三度妊娠してその都度夫には内緒で中絶をしているのではないか……藤木はそう疑っていた。華江は母親が似合う女ではなかったし、その子が夫の子供である保証はなかっただろうからだが、四十二といえbaum子供を産む最後のチャンスだし、迷った末に今度は産む決心をしたのだとしたら……。

それなら妻だけでなく藤木にとっても高くつく贈り物だ。子供は欲しいと思っていた。だが……今の自由を失いたくないという気もちは妻以上に彼の方が強くもっている。

ドアが開き、受付の娘が「田村さんがいらっしゃいました」と告げた。

「田村って、一時にアポの入ってる？ だったらここへ通してくれ」

先週電話で手術を頼んできた患者である。手術を決定する前にまずカウンセリングをすることになっている。初めての患者は少なくとも二度、院長である彼の個室で徹底的に話しあった後、手術をするかどうかを決めることになる……。

「田村葉子^{はちこ}さんですね」

緊張気味に目を伏せて入ってきた女にデスクの上のカルテを見ながら、藤木はそう声をかけ、ドアから入ってすぐのソファを勧めた。

三十八歳。カルテには生年月日とともにその年齢が書き込まれている。あとは空白。その空白にこれから一時間近くをかけて医師は文字を書き込むことになる。

困惑気味に浅く腰をおろした女は、一度あげた目をすぐにまた自分の膝元へと落とした。

藤木は他の患者に向けるのと同じ優しい微笑で、

「あなたのように今でも充分綺麗な女性が、なぜ手術を受けたいなどと考えたのですかと訊いた。」

「ええ……あのう……」

患者は返事の言葉に迷いながら、膝の上においたハンドバッグの紐を指にからめている。

患者。そう、彼は自分の医院を訪れてくる女たちの『美しくなりたい』という欲望を潰瘍^{かいそう}や炎症と変わりない病氣と考え、彼女たちを『客』ではなく患者と呼んでいるのだった。彼自身はどんな女性にもそれぞれの自然な美しさがあって彼のメスの助けを借りずとも充分魅力的だと思っていたが、ある種の女たちの体には自分の容姿へのコンプレックスと美しくなりたいたいという夢とが黒い病菌のように確かに巣くっていて、彼がメスをとりその病菌をとりはらってやらなければ痛みのようにいつまでも悩みは残ってしまう。

正確に言えばそれは『より美しくなりたい』という欲望である。

藤木は大学の医学部を卒業後、渡米して世界最高の腕と言われるロスの美容整形外科医ジョン・ロバーツのもとで十年間働いていたが、そのロバーツ博士はいつもこう言っていた。

「どんな女でもみんな自分を美しいと信じているものだ。自分が醜いと悲観して私を訪ねてくる女なんて一人もない。女たちはみんな自分の手にしている宝石も悪くはないが、他人がもっている宝石の方が豪華に見えるので買い換えたいと思っているだけだ。その差額として大金を払うだけのことさ。いいか、美容整形の基本はそこだ。アメリカのトップレディたちに、よりいっ

そう完璧な美しさを与えてきた私の腕よりも、まずその考え方を学びとってもらいたいね」

世界的な名医は天才的な商人でもあった。藤木は帰国後まず新宿の貧しいビルの一室から始め、少しずつ拡張を重ねた末に、今では青山に近代的なビルを構えるほど成功したが、十四年前の最初の患者から今日の前に座った千数百人目かの患者まで一度として自分の方から手術を勧めたことはなかった。ドクター・ロバーツのやり方を真似て、むしろ手術に反対したが、逆にそれで患者を擱^{つか}んでいた。藤木の勧めどおり手術をやめようとした患者は一人もいなかった。自分を手術の必要がないほど美しいと言ってくれた医師なら必ず自分をもっと美しくしてくれるはずだと、女たちはさらに自分の夢と決意とに磨きをかけるのである。

「あなたはもう充分綺麗で、私の手で作り替える部分などどこにもありませんよ」

千数百回目の営業用の言葉を、だが、これまでとは違う声で語っている自分に藤木は気づいた。向かいあつて座った『田村葉子』というその患者は、目鼻だちも頬の線も整っていてどこにも修正を要するような目につく歪^{ゆが}みはない。化粧つ気のまったくない素顔で、髪は無造作に後ろで束ねているだけだが、それが自分の美しさを強調するための演出にしか見えなかった。強いて難点を探せば、伏せた目が頬に与えるかすかな翳^{かげ}だろう。それが表情を寂しくみせるが、翳は美しすぎる顔の言い訳のようで、その寂しさまでもが魅力になっていた。

「電話では顔を直したいとおっしゃってましたね」

そう訊きながら、藤木は微笑に包みこんだ目でさらに詳細を観察した。若返りのために皺^{しわ}をとってほしいという患者もいる。だが、この患者は三十八歳の年齢より五、六歳は若く見える肌の